



— 口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します —

「口腔機能低下症」は、う蝕や歯の喪失など従来の器質的な障害とは異なり、いくつかの口腔機能の低下による複合要因によって現れる病態。7つの下位症状のうち3項目以上該当する場合に「口腔機能低下症」と診断されます。詳細は日本歯科医学会発信の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」をご参照ください。

▶ 今までの診療スタイルをそのままに 「患者を助けた」を感じるために導入

当院は、1階を治療用フロア、2階をメンテナンスフロアにしており、2階の一角に口腔機能専用検査室を設置しました。ユニットでは治療やメンテナンスを従来どおり実施することができ、今までの診療スタイルをそのままに口腔機能検査を導入しています。口腔機能検査を導入してからは、患者さんの口腔内だけではなく全身の様子を確認するようになりました。認知機能低下が疑われる方を地域包括支援センターへ連絡した事例もあり、患者さんの健康に貢献できたと感じることがあります。



【舌圧検査の様子】



【口腔機能検査室】

Point! 専用のスペースで効率的に検査を実施できます。



口腔機能低下症
そうなる前に「オーラルフレイル」の検査を受けましょう
・検査は保険適応です(2,000円以内)
・当院では、65才以上の方へ年に一度
70才以上の方へ半年に一度の
検査を推奨しています
オーラルフレイルを予防して健康寿命を伸ばしましょう

【院内ポスター】
65歳から検査を案内し、70歳以上は原則検査を実施する院内システム。



医療法人ハッピースマイル
いいやま歯科医院
(埼玉県草加市)
院長 飯山 浩靖 Dr

いいやま歯科では、『For You』というコンセプトのもと日本一元気な明るい歯科医院をめざし、すべての人のための医療を提供しています。認知症や要介護予防につながり「患者を助けた」を感じる可能性を期待し口腔機能検査を導入しました。

症例



患者:72歳 女性

歯周病安定期治療で通院中の患者さん。口腔機能低下症を疑い検査を実施。

口腔乾燥、咬合力低下、舌口唇運動機能低下、低舌圧の4項目が該当し口腔機能低下症と診断。検査結果と口腔機能年齢を用い口腔機能が低下していることを説明。管理指導として早口言葉、滑舌の演習、舌鳴らし及び舌の筋力訓練を指導。



指導はメンテナンス担当の歯科衛生士が実施。患者さんの生活状態まで把握している担当歯科衛生士が説明することで、状態に合わせた指導が可能になります。口腔機能維持には普段から噛み応えのある食事をすることが重要です。

Point! 1つの指標で実年齢との比較ができ患者さんのモチベーションが上がります。

口腔機能年齢		実年齢 72歳		↓若い / ↑高い	
▽は注意		口腔機能年齢 76歳		4	
2021/8/11	基準値	測定値	年齢平均値	機能年齢	
口腔清掃	9	7	5		
口腔乾燥	27	✓ 26.8	✓ 27.4		
咬合力	500	✓ 254	✓ 655	80	8
歯数	20	✓ 13	✓ 17.2		
滑舌:パ	6.0	✓ 5.8	✓ 6.1	74	2
滑舌:タ	6.0	✓ 4.4	✓ 6.2	86	14
滑舌:カ	6.0	✓ 5.0	✓ 5.7	78	6
舌圧	30.0	✓ 24.3	✓ 28.6	76	4
咀嚼	100	128	105	68	-4
嚥下	3	0	✓ 2		

昭和大学歯学部高齢者歯科学講座考案の口腔機能年齢を採用。
(<http://geria.jp.net/?p=578>よりダウンロード可能)



歯周病の管理で口腔内ばかりを診てきましたが、口腔機能検査を実施するようになり全身の様子を確認するようになりました。メンテナンス担当歯科衛生士として、口腔機能管理を通じて患者さんの健康長寿に貢献できると感じ医療人としてやりがいを感じています。
(担当歯科衛生士)



スタッフの皆様

※2021年9月現在の情報です。

